OUMC

大阪大学山岳会 会報
No.4
2002年6月
発　行　大阪大学山岳会
〒565－0871 吹田市山田丘２－１
大阪大学工学部建築工学専攻 大野研究室内
ＴＥＬ０６－６８７９－７６３５
ＦＡＸ０６－６８７９－７６３７

会長に就任して

大野　義照

大阪大学山岳会は１９９９年に創立50周年を迎え、昨２００１年夏には、50周年記念碑を白馬村の対岳館に建立することができました。戦後間もない49年の設立以来50年の会の歩みを振り返ると、白馬岳主稜の厳冬期初登攀や黒部下・上廊下横断など、積雪期の後立山連峰を中心にルート開拓を行った創生期、ヒマラヤＰ29峰遠征に熱情を注いだ60年から70年、ヒマラヤ登山でもライトエキスペディションを行った80年から90年、若い会員が減少した半面、山行・懇親会が盛んになった90年代に大別できると思います。

この間、70年には住吉仙也登攀隊長率いる第４次遠征隊によってＰ29峰（７８３５メートル）の初登頂に成功しましたが、初登頂者である渡辺洋隊員とハクパ・ツェリンを失いました。62年には、関係の体育会クラブと協力して白馬山麓に山小屋「栂の木寮」を建設し、新人の冬山合宿などに利用するとともに、毎年８月には現役を含めた会員が集うようになりました。その山小屋は96年の大雪で傾き、一般学生の利用が減ったこともあり、解体され、自然に戻されました。その後、白馬集会は、対岳館に場所を移して続いています。

２０００年から新しい会報「ＯＵＭＣ」が毎年発行されるようになり、最近は、総会、白馬集会、新年懇親会のみならず、積雪期登山や日帰り山行、種々の懇親会が企画され、会の活動が活発になってきたことは誠に喜ばしい限りです。

それに比べて気がかりなのは、現役山岳部の低迷です。部員数が減少し、部員が一人もいない学年さえあります。このような状況が続くと、山岳部の伝統や技術が伝わらない、それが事故につながりかねないという悪循環すら懸念され、４年間で卒業していく大学山岳部固有の課題が顕著になっています。これに対処すべく、会として今まで以上に現役への援助を行いたいと思いますので、特に若いＯＢ諸氏の協力に期待いたします。

近年、大阪大学では教養部が解体され、１年次から専門学部に所属し、専門科目を学ぶのが普通になっています。しかし、大学は学問を学ぶ場であるとともに人間教育の場でもあります。他学部の学生と寝食を共にし、自然との共生を目指し、危機管理を学ぶ山岳部は、人間教育の場を提供しているとさえ言えます。このような点からも会員諸氏に一層の応援をお願いしたいと存じます。

昨年、会員のお一人が、個人山行の北アルプスで滑落事故死されました。一度中断していた山行を再開された、あるいは、これから再開される会員も多いと思います。私もその一人ですが、いわゆる中高年登山に対するケアも山岳会の一つの課題ではないかと考えています。

この度、篠田軍治先生、水野祥太郎先生、徳永先輩の後を継いで会長に就任致しました。私は63年、工学部に入学と同時に山岳部に入部しましたが、篠田先生はその時の山岳部長兼会長であり、水野先生は、私が参加した第４次Ｐ29峰遠征隊の総隊長でした。徳永前会長にはＰ29峰遠征の後、事務局を担当することになって以来、公私にわたりお世話になりました。このように山岳会の50年の約３分の２を会員として皆様にお世話になってきました。今後は会の一層の発展のため微力を尽くしたいと存じます。ご指導、ご支援の程よろしくお願い致します。

50周年記念碑が完成
八方で除幕式と集会

本会の夏の恒例行事である白馬集会は2001年8月25日から26日にかけて長野県白馬村八方の「ホテル対岳館」で開かれた。今回は、会員の寄金をもとに対岳館敷地内に建てられた「創立50周年記念碑」の除幕式を兼ねたこともあって、28人もの多数の会員・家族が参加、記念碑完成を盛大に祝うかたわら、懇親を深め合った。

除幕式で祝詞を聞く会員たち

1日目は、夕食のあと、例によって別棟の「与兵衛倶楽部」へ。前沢祐一氏（工37）が持参した、前年秋のP29登頂30周年記念ヒマラヤトレッキングの写真アルバムなどを囲んで、遅くまで懇談が続いた。

姿を現した記念碑。台座を含めて高さ約1メートル、幅1.6メートルある

除幕式は2日目午前11時から記念碑前で催され、八方細野諏訪神社の平林秀文宮司の司式のもと、お祓い、祝詞などに続いて、故・徳永篤司会長令嬢、智子さんが、碑に掛けられた白布をにこやかに取り除いて全員で完成を祝った。続いて、最古参会員の大島輝夫氏（理27）が碑文を朗読、大野義照会長らが玉串をささげた。

式後の直会では、会員が長年お世話になっている対岳館の丸山庄司館主にステンレス板に刻字した感謝状額が大野会長から贈られた。

27日の懇親ゴルフ大会は12人が参加して長野市の川中嶋CCでおこなわれ、初参加の兼清喜雄氏（工35）が優勝した。

集会参加者は次のみなさん。

徳永智子（徳永前会長令嬢）、大野義照会長（工42）、大島輝夫（理27）田島汎（経28）、山本光二（法29）、二木節夫（工29）、近璋三（工29）川島勇（工29）、大村一生（理29）、木村裕一（経31）、杢中勝（工31）、山本進一郎（理31）、宍戸元（医32）、西川元夫（工32）、坪井和子（薬33）、岡田博司（法33）、野田憲一郎（経35）山本信樹（工35）、米林外茂男（工35）、兼清喜雄（工35）、前沢祐一（工37）、佐藤毅（工37）、横尾秀次郎（工39）、高田邦雄（経39）、山田靖則（工46）、佐々木徹（経57）

建立までの経過

今回の創立50周年記念碑建立は、2000年春に発病した徳永篤司前会長が、入院先の阪大附属病院で何人かの会員に、会ゆかりの地である白馬村の対岳館にぜひとも碑を建ててほしいと要請したのがきっかけであった。

これを受けて、同年8月末、恒例の白馬集会を対岳館で開いた際、丸山庄司館主に趣旨を説明し、基本的な了解を得ることができた。この直後の9月4日、徳永会長が亡くなるとともに、理事会メンバーが会合を重ねるかたわら、打出英樹会員を通じて大林組建築設計管理部の田澤道生氏にも意見を求め、次のような大綱を決めた。

一、完成時期は2001年夏。

一、碑文は簡潔にし、地元への感謝の意を併記する。

一、建立者名は徳永会長とし、日付は死去の日とする。

一、施工者選定は現地を重視し、丸山氏の意見を尊重する。

一、費用は100万円程度とし、会員からの寄金を充てる。

この大綱をもとに、建立計画を進め、同年末からは募金活動を展開し

た。検討に最も時間を要したのは碑文であるが、東京の会員の意見も聞いたうえ、翌年1月には成案を得ることができた。施工面では、丸山氏と協議の結果、丸山夫妻の旧知である戸隠村、岡沢石材の岡沢清雄氏に依頼することにした。大林組の田澤氏は碑の形状などを岡沢氏に連絡、岡沢氏は行政の許可を得て、後立山山麓の松川で原石を採取し、加工に着手した。

5月中旬、住吉、田島、木村、打出、山本光の各会員と田澤氏は対岳館に赴き、丸山夫妻の案内で岡沢石材を訪問、加工中の碑を実見し、碑文を手渡した。そして8月上旬、対岳館駐車場わきに台座を含む碑の据え付けを終えた。会員からの寄金は102名から総額95万円に達し、建立費用をまかなって余りあるものであった。

2001年8月26日、恒例の白馬集会の一環として碑の除幕式が挙行された。すべてが終わって、改めて碑の前に立ち、山の方を見ると、正面に大きく遠見尾根が横たわり、その奥に鹿島槍の北壁が黒く光っていた。徳永さんが、若き日々、情熱を込めて登攀した山々である。私には、この碑は、一面では徳永さんのモニュメントでもあるように思えてならなかった。

（山本　光二記）

感　謝　状

対　岳　館

丸　山　庄　司　殿

貴殿の経営される対岳館は　先代丸山與兵衛氏の時代から　旧制浪速高等学校山岳部および大阪大学山岳会の後立山方面における登山活動の根拠地となり　多大なご支援によって幾多の登山記録を残すことができました

浪速高校では 今西寿雄・佐谷健吉らの著名な登山家を輩出しました　大阪大学でも多くの優れた人材が育ち　特にヒマラヤのP29峰（7871メートル）には 篠田軍治・水野祥太郎両教授を隊長として4次にわたって登山隊を送り　1970年秋に初登頂を成し遂げました

このような成果は貴殿並びにご家族のご協力に負うところが大きく 創立50周年に当たり記念碑を建てて深く感謝の意を表します

2000年9月4日

大阪大学山岳会
会長　徳永篤司

記念碑募金寄付者一覧

（卒業年次順、敬称略）

河原暲（工12）遠藤常忠（工13）吉田達三（工14）新谷五郎（医14）川村宏（工15）奥村正己（工16）大島直義（工16）盛岡鈴子（工17盛岡英次郎氏夫人）村田良二郎（工20）友田洋一（医22）大久保勝巳（医23）伊藤俊夫（医23）渡辺修治（医25）徳永篤司（医26）加藤幹太（理27）大島輝夫（理27）久保三朗（工27）由比浜哲也（文28）堺谷弘（理28）田島汎（経28）住吉仙也（医29）川島勇（工29）近璋三（工29）二木節夫（工29）宮本貞雄（工29）大村一生（理29）山本光二（法29）東雍（医30）岩永剛（30）尾藤昭二（医30）三枝礼子（薬30）広橋茂（法30）木村裕一（経31）高木俊夫（理31）山本進一郎（理31）関本靖裕（理31）杢中勝（工31）鷺沢　忍（工31）宍戸元（医32）西川元夫（工32）細見一仁（歯32）石沢命久（歯32）片山徹（医32）辻川眞（経32）岡田博司（法33）樋下重彦（工33）坪井和子（薬33）畑幸代（文33）米林外茂男（工35）山本信樹（工35）田端剛爾（工35）平野恵一（工35）平田彰（経35）野田憲一郎（経35）兼清喜雄（工35）玉井康雄（理36）村井忠雄（工36）田井英男（工36）広瀬貞雄（工36）打出英樹（工37）高橋雄二（工37）米沢成二（工37）前沢祐一（工37）佐藤毅（工37）大角美佐子（薬37）保母武彦（歯38）大工原恭（歯38）三沢日出夫（工38）山本彰三（法38）高田邦雄（経39）木原秀幸（工39）大川和秋（工39）横尾秀次郎（工39）桑原昭夫（工40）牧野大輔（理40）播本裕晃（法40）石浜高明（工41）豊坂昭弘（医41）原治左ヱ門（理42）辻信男（工42）大野義照（工42）糸井文彦（経42）泉田浩二（工42）細川明彦（工44）畑中薫（医44）甲田吉彦（基44）黒田治朗（医44）岡田謙治（法44）黒岩芳夫（経44）石原敏雄（理45）鹿野信吾（理46）中岡和哉（医46）山田靖則（工46）薮本勝（工47）高橋正身（理48）上松一雄（工50）松浦寿彦（工50）大宅幸夫（歯51）明神知（基53）森保知（工54）大西啓之（人62）尾崎夏樹（経平7）

102名　計950、000円

「百名山」やったぞ
会員2氏が相次ぎ完登

登山家、作家として知られる深田久弥氏が選定した「日本百名山」。中高年者の登山熱の高まりと相まって、その完登がブームとさえ言える様相を呈している。名山に選ばれた各地の山は、シーズンともなると、行列ができるほどのにぎわいぶりだ。そんななか、当会会員の中にも百名山完登を達成した人が現れた。岡久光明、井上太一両氏の百名山挑戦記をお届けする。さて、あなたは、いくつ登った――。

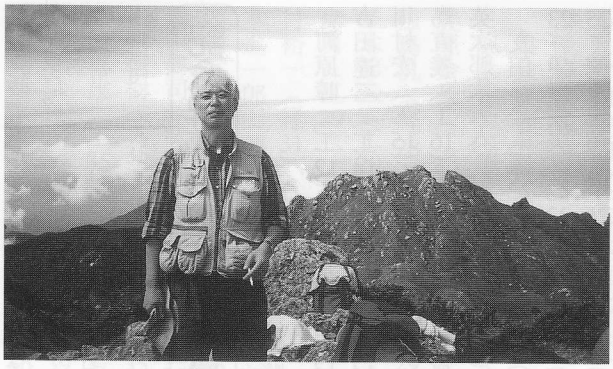
健康回復願って挑戦

岡久　光明

百番目の山は、最北の山、利尻岳と決めていた。もう一つ残っていた岩手山が噴火の危険から山頂登山が禁止され、当分、解禁のめどがたたなかったためで、２０００年7月、家内と二人で利尻岳に登頂した。これで「深田百名山」は卒業だ、これからは好きな季節に好きな山へ、ピークハンターでなく、楽しむ登山をと思った。そのあとは同年8月に針ノ木岳～烏帽子岳の縦走、10月には島々から霞沢岳、定年後の２００１年5月には毛勝山（山頂踏めず）と、すべて単独で、静かな山々を楽しんでいた。ところが、百名山を一つ残しているという事実は常に心の片隅に残った。そんな時、山岳雑誌で「7月1日、岩手山登山禁止解除」の記事を目にし、早速、地元の役場に確認の電話をし、登山計画を立てている自分に、百名山の魔力の大きさを感じたものだ。

6月29日朝、敦賀港からフェリーに乗り、翌朝、秋田港に到着。秋田駒ガ岳に登り、バス、電車、タクシーをフル利用して、その日のうちに岩手山の焼走り登山口近くのキャンプ場に到着した。ツエルトの中で雨音を聞きながら、翌日の禁止解除を待つ。早朝4時半、登山禁止の看板と綱がすっかり取り外された登山口から山頂をめざす。途中、柳沢登山口を午前0時に出発したという高齢者を交えた下山中のパーティーに会っただけの静かな登山路。雨天ながら、どこまでも続くコマクサのお花畑、シラネアオイ、サンカヨウ等の花々が景色に代わって目を楽しませてくれる。

7月1日午前9時5分、フィナーレの山、岩手山（２０３８ｍ）の頂上へ。雨交じりの烈風とガスの中、登山者の姿は無く、一人、百名山完登を心に刻む。祝ってくれる仲間もなく、あっさりと頂上を後にした。下山途中、雨の中を登ってくるたくさんの登山者に出会う。下山後、「丸2年ぶりの禁止解除で、雨の中、１０００名近くが入山。その中には岩手山を最後の百名山とする登山者が多数いる」とのニュースを聞く。



1995年10月7日　宮之浦岳頂上で

振り返ると、初めての百名山は大峰山であった。高校2年の夏（１９５８年）、山と言えば六甲山以外知らない仲間5名で、毛布と缶詰と飯盒を持って、運動靴で吉野山から前鬼口までの奥駆けに挑戦した（山岳部同期の横尾秀次郎君も同行メンバー）。当時はすべて無人小屋で、3日間、人に会った記憶が無いぐらい静かな山だった。

社会人になっても会社の山岳部に籍を置き、有給休暇をフルに使って、会社の仲間や学生時代の友人らと登山を続けたが、結婚、子供、仕事と障害が増えるにつれ、いつの間にか山は過去のものになっていた。入社時に55キロだった体重は、やっと大阪に帰った１９９３年には76キロと過体重もいいところで、腰痛が持病となっていた。若い頃は「病気になれば山に行けば治る」がモットーで、医者いらずの体が唯一の取柄であったのに。

そこで、健康を取り戻すには山へ行くのが最上と考え、その年の8月、復帰第1号の山として西日本の最高峰、石鎚山を選んだ。ロープウェイもあり、頂上小屋の予約もした。昼

近くにふもとに着いたが、ロープウェイが前夜の強風で故障し、休止中。諦めて、沢コースを夜明峠経由で頂上小屋を目指したが、暑さと水の飲み過ぎでバテバテとなり、午後7時近く、まだ峠はるか下で野宿を余儀なくされる始末だった。これがきっかけで、約1年、運動と節食で11キロ体重を減らし、1994年7月から意識して百名山に登りだした。

石鎚山を登った時点で百名山は39山登頂していた。初めは過熱気味の百名山ブームを冷めた目で見ていたが、やがて60山を超えてくると百名山完登がすべてとなり、悪天をついての登頂、冬期は雪の少ない九州の山へと、ピークハンターに徹して1年中登るようになった。

94年以降に登った61山のうち、40山は単独行。車の運転ができないので、バス、タクシーなど、下調べに気を使った。北海道の山はヒグマの危険、足の便の悪さ（車必要）で、すべて友人らとのグループ登山で踏破した。後半は数を意識して、点登山から面登山へと効率的な選定をし、夏季や連休などに1回に3、4山と欲張って稼いだ。各年の登頂数は次の通り。

94年＝7山、95年＝6山、96年＝8山、97年＝11山、98年＝13山、99年＝14山、2000年＝1山、2001年＝1山。

百名山登山で良かった点としては

・選り好みせずに、低山を含め日本中のいろいろな山と温泉と土地の風物が楽しめた。

・思いがけない素晴らしい風景、高山植物、山での忘れられない人との出会い等があった。

・百山完登後の自由。ピークハンターでなく、自分の好きな山へ、好きな季節に登れる自由を得た。

反省点としては

・会社人間の悪い癖で、山を楽しむことは二の次で、目標達成のため未踏の山が減ることに無上の喜びを感じ、悪天の中、ただ、がむしゃらに登ったこともたくさんあった。頂上を踏んだ山のうち、3分の1近くは雨やガスの中だった。

結構、危ない目にも遭った。

・北海道の旭岳でガスと烈風の中、道を間違い、さまよった末、夜7時近くにロープウェイ駅に辿りつき、駅で泊めてもらった。

・5月に草津白根山のバス停でピッケルを忘れ、そのまま日光白根山に行くが、雪の多い年で、頼りない4本爪のアイゼンのみで、下りは死ぬ思いであった。

・11月下旬、那須の茶臼岳へ行き、烈風の中、ピッケルで全身を支え、一歩一歩突風をやり過ごしながら進んでいたが、頂上近くで、強風に吹き飛ばされ、運良く、膝を岩にぶつけただけで助かった。

深田百名山を終えて、数合わせの山登りからは足を洗ったと考えているが、私の山登りは未踏の山の頂を極めることに喜びを感じるだけに、定年でたっぷりと時間がある今後は1等三角点の山、未踏の「300名山」等、体力の続く限り挑戦していくような気がする。

（1965年経済学部卒）

40山は妻と一緒に

井上　太一

2001年7月27日朝6時10分、快晴の立山の大汝山頂に妻と立ち、ワインで乾杯――。私の百名山登山もようやく終了した。後立山連峰をはじめ、槍・穂高、そして雄大な剱岳が一望でき、30年近く前の夏山合宿や雪上訓練が思い起こされ、感無量であった。今回記録にまとめたのは、学生時代に鍛えていただき、また百名山登山を応援していただいた諸先輩、同輩の方々に感謝の気持ちを表したいからであった。

75年、修士課程を終了した時、たまたま深田久弥の「日本百名山」を購入し、自分の登った山を数えてみたら、北・南アルプス、北海道を中心に26山に登っていた。東北、関東、新潟に2000メートル級の山々が数十あり、とても全て登れるとは思えなかったが、同期入社の仲間と木曽駒、甲斐駒へ。結婚後は恵那山、安達太良山、那須岳などへと、妻子とともにキャンプと登山を楽しみながら増やしていった。89年に登った天城山が40山目で、百名山完登も可能かと欲が出てきたが、40代前半は開発、営業の仕事に追われ、年1、2山がやっとであった。

転機になったのは、会社のリフレッシュ休暇制度であった。96年6月1日から2週間、東北地方を妻とドライブしつつ、蔵王山、早池峰、岩手山、岩木山、八甲田山、八幡平、鳥海山、月山、朝日岳、飯豊山、会津駒ケ岳、男体山、奥白根山、至仏山と登り、帰りの駄賃で赤城山と計15山を加えた。岩手山から会津駒までと至仏山の10山はほとんど雪山で、妻も素人ながら杖を突きつつ、よく頂上までついてきてくれたと感謝している。

岩手山は、山頂直下のガレ場で雲行きが怪しくなり、大きな砂粒が飛ぶほどの強風だったため、危険を感じて引き返した。朝日岳は、最高峰より56メートル低い西朝日岳で引き返し、飯豊山も無人の石転び沢雪渓を往復

12キロ、恐怖と戦い、80メートル低い北股山でよしとした。これら3山は最高峰こそ踏まなかったが、一生の思い出となった雪山だった。登山後は次の山の麓までドライブして宿を探し、温泉と山菜料理を楽しむ毎日で、浮世を離れた夢のような旅であった。

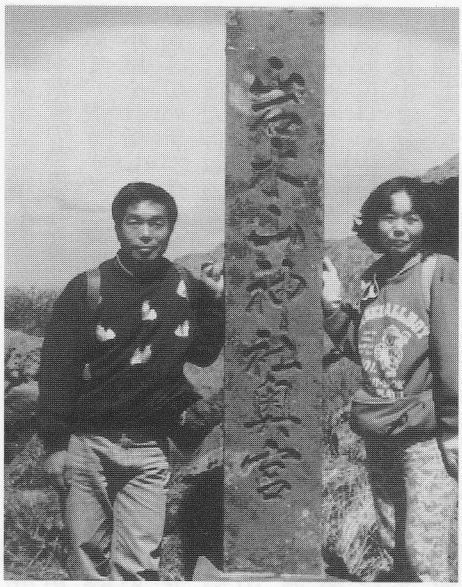
これで計67山となり、残りも射程圏内に入り、遠くは羅臼岳、利尻岳、祖母山などへ出張のついでに足を延ばしたり、夜行バスで伊吹山、剣山と梯子をしたり、貪欲に稼いでいった。昨年は退職時に妻と南に飛び、開聞岳と屋久島の宮之浦岳を登った。屋久島は3日続きの雨で、雨中のスタートとなったが、原始の気分漂う屋久杉の山腹、森林限界から上の高山植物、湿地帯、流れる雲と、本州では味わえない幻想的な山行だった。島一周のドライブでのサルの群れ、引き潮時の海中温泉と、ぜひ皆様にも薦めたい。

なお、文中で触れた東北の3山をはじめ、浅間、利尻など計7山は、登山禁止で別の峰に登ったり、風雪、雷でピーク直下で引き返したりで、最高峰を断念した。このため、この報告も「百名山登頂」でなく、「百名山登山」としたい。

最後に皆さんに参考になればと、思いつくままを列挙します。

1．百名山に登れたのは次の利点があったからである。

①交通の便のよい東京近辺に居住していた②比較的休暇の取れる職場だった③北海道、九州などへ出張が可能だった④家族、特に妻の協力があった。妻は40山に同登してくれ、二人で麓までドライブできて本当に助かった。深く感謝している。また、5人の子供をそれぞれ18山～11山の山頂に連れて行った。



1996年6月4日　岩木山頂上で妻と

2．百名山に登ってよかったこと。

①日本アルプス以外の個性的な山を多く知った②じわじわと来る達成感③再就職先探しの際、体験が話題として役に立った④各地の温泉に入れた⑤ヒグマ、ツキノワグマ、カモシカ、エゾシカ、猪、猿などに出あい、サファリ気分が楽しめた⑥各地で古い友人を訪ねることができた。

3．残念だったこと。

①最近は、百名山というだけで、特に土、日はどこも素人の団体登山でいっぱい②日程に限りがあり、義務感からピークを踏んだだけで、楽しむ余裕がなかった山も多かった③百名山以外の山は登る余裕がなかった④山以外の楽しみは排除し、家族はあきらめ顔だった

4．深田久弥の名山選定の確かさを感じたが、以下の7山は観光地化などから百名山から外すべきだと思った。

①筑波②赤城③伊吹④美ケ原⑤霧ケ峰⑥草津白根⑦荒島

5．代わりの案と言うより、私の好きな7山は

①カムイエクウチカウシ②ウペペサンケ③ニペソツ④石狩山⑤白神山⑥氷ノ山⑦桜島

6．以上に名を挙げなかった中で、アルプス以外でお薦めの山は

①阿寒②トムラウシ③幌尻④平⑤雨飾⑥火打⑦四阿⑧巻機⑨苗場⑩甲武信⑪白山⑫大台ケ原⑬石鎚⑭九重

7．最後に、私が登った深田久弥の「世界百名山」の4山

①キナバル（4101メートル）②ポポカテペトル（5450メートル）③富士山④阿蘇山

（1973年理学部卒）

深田久弥氏の選んだ「日本百名山」は次の通り。

利尻岳、羅臼岳、斜里岳、阿寒岳、大雪山、トムラウシ、十勝岳、幌尻岳、後方羊蹄山、岩木山、八甲田山、八幡平、岩手山、早池峰、鳥海山、月山、朝日岳、蔵王山、飯豊山、吾妻山、安達太良山、磐梯山、会津駒ケ岳、那須岳、魚沼駒ケ岳、平ケ岳、巻機山、燧岳、至仏山、谷川岳、雨飾山、苗場山、妙高山、火打山、高妻山、男体山、奥白根山、皇海山、武尊山、赤城山、草津白根山、四阿山、浅間山、筑波山、白馬岳、五竜岳、鹿島槍ケ岳、剣岳、立山、薬師岳、黒部五郎岳、黒岳、鷲羽岳、槍ケ岳、穂高岳、常念岳、笠ケ岳、焼岳、乗鞍岳、御岳、美ケ原、霧ケ峰、蓼科山、八ケ岳、両神山、雲取山、甲武信岳、金峰山、瑞牆山、大菩薩岳、丹沢山、富士山、天城山、木曽駒ケ岳、空木岳、恵那山、甲斐駒ケ岳、仙丈岳、鳳凰山、北岳、間ノ岳、塩見岳、悪沢岳、赤石岳、聖岳、光岳、白山、荒島岳、伊吹山、大台ケ原山、大峰山、大山、剣山、石鎚山、九重山、祖母山、阿蘇山、霧島山、開聞岳、宮之浦岳

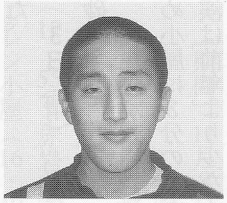
大阪大学山岳部 活動報告

2001年度

リーダー所感

高沢　恒雄

2001年度の活動は、前年夏山定着合宿の剣岳における1年生の滑落事故の反省から、部全体のレベルアップに重点をおき、翌年度へのステップアップとなるよう努めた。しかしながら、引継ぎ早々の春山山行で、リーダーの判断力不足から、早くも雪崩事故を起こしてしまった。



この事故の反省会では、田中喜樹さんをはじめとする多くのOBの方々の話を聞くことができ、また、部員の山に対する慎重な態度を養うことになったという点で、とても重要な山行になったと思う。

その後の穂高・涸沢での新人歓迎合宿は、雪上訓練を中心に実施した。しかし、訓練に終始したばかりではなく、夏山定着合宿での高沢、河野のチンネ左稜線登攀などは満足できるものとなった。雪山訓練合宿や冬山合宿では、それほど厳しくなかった分、新入たちも楽しめたようで、これからの山行に対して、ますます意欲的に取り組んでくれることだろう。

2001年度の活動を振り返ると、OBの方々に様々な形で助けていただいた1年であったことがよくわかる。このような恵まれた環境に感謝し、またそれを最大限に生かしながら、現役部員の力を蓄え、力強い山岳部を目指していきたいと思う。

◆春山合宿・霞沢岳

［期間］3月28日～4月1日

［メンバー］高沢（L・2年）、河野（SL・2年）、田村（4年）、乾（2年）

3月28日（晴れのち雪）　中ノ湯（9・10）～上高地（11・00）～徳本峠小屋（16・20）

上高地あたりまでは天気が良かったが、途中から雪がちらつき始めた。徳本峠に近づくと、膝までの雪があった。

29日（雪）　出発（6・20）～2428mジャンクションピーク（10・30）～2260m最低鞍部（12・00）

前日に続いて、乾いた雪が降り続く。樹林帯のせいか、風は弱かった。ジャンクションピークへの登りでは腰までのラッセルであった。

30日（雪）　出発（6・20）～2530m付近で雪崩発生（10・35）～縦走路に復帰（13・00）～最低鞍部（17・00）

朝から、乾いた雪が降り続いていたが、風は弱かった。この日はアタック行動だった。2530m付近の小ピーク目前で、先頭の高沢が雪崩を誘発し、北東側の沢に、最も長かった者で200mほど（高度差）流される。幸い、全員自力で脱出できたものの、田村が足首の捻挫を、乾が腰の痛みを訴える。高沢と河野にはけがはなく、2人をサポートしながら、近くの尾根を登り、縦走路へ復帰した。

夏山定着合宿　剣沢で

31日（雪）　出発（7・45）～徳本峠（13・00）～明神池（17・00）～上高地（18・45）

ジャンクションピークからの下りに少々てこずる。徳本峠からの下りも、来たときより雪がかなり増えていた。田村がどうしても31日中に下山したいとのことだったので頑張ってみるが、上高地で限界と判断し、幕営する。河野が首の痛みを訴えていた。

4月1日（雪）　出発（7・45）～中ノ湯（10・50）

予定していたバスに乗り、松本へ向かった。釜トンネルの中が所々、凍っていて、しりもちをついた者がいた。

◆夏山定着合宿　剣岳・真砂沢

［期間］8月2日～11日

［メンバー］高沢（L・3年）、河野（SL・3年）、原（3年）、渡辺（1年）、乾（3年）、竹内（1年）、以下OB＝寺田、田中、尾崎、卯城（監督）、礒部

8月2日（晴）　室堂（9・00）～別山乗越（12・10）～剣沢（13・

30）

この日の入山は現役部員と田中OBだった。やはり定着という形のため、普段の山行より重荷となったが、余裕を持って剣沢に着くことができた。

3日（晴）　出発（7・10）～真砂沢（9・40）

真砂沢にテントを移す。雪崩のため小屋は3分の2が壊れていた。雪渓は前年より少なく、土の上に設営することができた。この後、長次郎谷で雪上訓練を行う。

4日（曇りのち雨）

午前中は、前年の滑落事故を反省し、田中OBの指導の下、前日に続いて雪上訓練。雨はテントに戻る頃には大降りになった。礒部、寺田両OBが入山する。

5日（晴）　出発（5・45）～源治郎尾根1峰（13・40）～本峰（17・05）～真砂沢（21・15）

田中OBが下山。残り全員で源治郎尾根に取り付く。ルンゼで少してこずり、数回ロープを出して予定時間を大きく超える。幸い、2峰の懸垂下降の順番待ちもなく、スムーズに通過できたが、本峰に着いたのは17時を過ぎていた。真砂沢への下降には平蔵谷を使う。ヘッドランプでの行動を強いられた。

6日（晴）　出発（8・15）～ハシゴ谷乗越（10・10）～黒部別山途中の2200m付近（12・40）～真砂沢（15・30）

計画では八ツ峰6峰Cフェース登攀の予定だったが、前日の疲れがあったため、黒部別山を目指す遠足となった。ハシゴ谷乗越からは藪こぎとなる。予想以上に時間を取られ、途中で引き返す。寺田OBが下山し、卯城OBが入山する。

7日（雨のち曇り）　停滞

朝から強い雨が降り、停滞とする。乾、竹内が下山し、尾崎OBが入山する。

8日（晴）　出発（4・20）～池ノ谷乗越（7・10）～チンネ左稜線取り付き（9・00）～チンネの頭（14・30）～真砂沢（17・50）

高沢・卯城、河野・尾崎の2パーティーはチンネ左稜線を、渡辺・原・礒部のパーティーは6峰Cフェースの剣稜会ルートを登る。長次郎雪渓は池ノ谷乗越まで続いていた。チンネでは卯城、尾崎両OBの指導の下、快適に登攀する。核心のT5は難しかったが、大きなミスもなく終了する。Cフェースもつつがなく登攀する。

9日（雨）　停滞、ビバーク訓練

雨のため停滞する。礒部OBが下山。ビバーク訓練の頃には雨が上がっていた。

10日（曇り）　出発（5・45）～二股（6・45）～仙人池（8・10）～真砂沢（10・35）

ビバーク明けは体が固かった。何の問題もなく仙人池に着いたが、池に写る八ツ峰は曇天のため見られなかった。

11日（晴のち雨）　出発（7・55）～剣沢（9・50）～別山乗越（11・20）～室堂（13・15）

朝は晴れていたのだが、昼頃から小雨が降り出した。

雪山訓練合宿　王滝頂上で

◆冬山偵察山行・南アルプス

［期間］11月1日～4日

［メンバー］高沢（L）、渡辺

11月1日（晴）　夜叉神峠登山口（9・25）～夜叉神峠（10・15）～杖立峠（11・45）～苗平（13・20）～南御室小屋（13・55）

よく晴れていて、遠く富士山が見えた。道はよく整備されており、大変歩きやすかった。コースの途中で出会った登山者は10人を超えた。積雪は全くなかった。

2日（晴）　出発（6・00）～薬師岳（7・00）～地蔵岳（9・30）～高嶺（10・40）～白鳳峠（11・40）～早川尾根小屋（13・30）

薬師岳の辺りから森林限界を越える。地蔵岳に向かうにつれ、岩も増える。高嶺へ向かうと、少し尾根が痩せていた。高嶺から急勾配の坂を下り、再び樹林帯へと戻る。早川尾根に入ると急に人が減った感じがした。アップダウンを繰り返して早川尾根小屋に着く。この日も雪はなかったが、小屋で水を汲むことができた。夜は冬季小屋に泊まる。

3日（曇り）　出発（5・45）～アサヨ峰（7・50）～仙水峠（10・00）～駒津峰（11・10）～駒ケ岳（12・40）～仙水峠（14・30）～仙水小屋（15・00）

仙水峠まではすいすいと進むが、だんだん天候が怪しくなり、仙水峠を越えたあたりでとうとう降り始めた。駒津峰まで急登を登り、みぞれ

混じりの中、直登ルートの岩稜帯を登る。駒ケ岳にはたくさんの登山客がいた。雪が付いていなかったため、下りは夏道を通る。

4日（晴）出発（6・25）～大平山荘（7・00）～戸台大橋（10・40）

前日降っていた雪は夜半にやみ、出発時には天候が回復し始めていた。うっすらと雪が積もっていた。北沢峠にはまだバスが通っていたが、冬山の偵察なので戸台まで歩くことにする。八丁坂までは分かりやすい道があったが、だんだんとあいまいになってくる。丹渓山荘は跡形もなくなっていた。所々、道が崩壊していて、地図の道もあまり当てにならなかった。川沿いをたんたんと歩き、戸台大橋につく。

◆春山偵察山行・八ケ岳

［期間］11月2日～4日

［メンバー］河野（L）、原

11月2日（晴）美濃戸口（9・50）～美濃戸山荘（10・35）～赤岳鉱泉（12・55）～赤岩の頭（15・45）～オーレン小屋（16・40）

赤岳鉱泉からの登りは大変つらかった。赤岩の頭に近づくと、急に視界がぱっと開け、硫黄岳の稜線が迎えてくれた。しんどさばかりが体にのしかかって限界を感じていた気持ちが一気に晴れ晴れとする。

3日（曇のち雨のち雪）出発（6・25）～夏沢峠（6・45）～硫黄岳（7・40）～横岳（9・05）～赤岳山頂（11・25）～赤岳鉱泉（12・55）～赤岩の頭（14・30）～オーレン小屋（15・10）

風で右半身を凍らせながら硫黄岳山頂に到着。目出帽で完全防備の上、横岳に向かう。時々、体が浮きそうになるほどの突風を受けながら歩く。赤岳への登りは心臓が口から飛び出そうだった。赤岳山頂からは小雨が降りはじめた。

赤岳鉱泉からの登りは、前日たどったコースであることと、危険個所がなかったことから、それぞれのペースで自由に歩いた。しかしながら、どこで落ち合うかということについて意思疎通が十分にはかれていなかったため、後続の河野は少々あせりも覚えた。やはりパーティーは分散すべきではないし、仮に分散するとしても、何らかの形で連絡が取り合えるようでなくてはならないと思った。

4日（晴のち曇時々雪）出発（7・55）～夏沢鉱泉（8・30）～根石山荘（9・30）～天狗岳（10・40）～黒百合平（11・50）～渋の湯（14・40）

朝、目覚めると、一面の雪景色。15㌢ぐらいの積雪で、無造作に放置されていた汚い廃材さえ美しく飾られていた。空は青く快晴で、雪の白とのコントラストがとても美しい。

秋山の雪は初体験であったため、少々びくびくしながら出発。根石山荘付近の強風地帯を無事通り抜け、先行パーティーのつけたトレースをたどる。黒百合平に到着してほっとしたが、ここから渋の湯までの道がいやらしく、表面にうすく雪をかぶった岩にバランスを奪われることしばしばであった。

◆雪山訓練合宿・御嶽山

［期間］11月23日～25日

［メンバー］高沢（L）、河野（SL）、乾、原、渡辺、竹内、寺田（OB）

雪山訓練合宿　二ノ池での雪上訓練

11月23日（晴）八海山荘（5・50）～三笠山（8・00）～王滝頂上（11・30）～二ノ池小屋（13・35）

雲ひとつない快晴。スキー場の人工雪以外ほとんど雪を見ることができなかった。王滝頂上まで苦労して登る。頂上では設営撤収訓練をした。二ノ池の方に回ると、やっと雪があった。この夜、高沢、乾、竹内、渡辺の4人がビバーク訓練を行う。もちろん大変寒かったが、風もあまりなく、雪も降らず、とてもきれいな星空が見えていた。1年生もそれほどつらくなかったようだ。

24日（晴）出発（9・00）～剣ケ峰頂上（11・30）～御鉢巡り（一ノ池周辺）～二ノ池小屋（14・30）

リーダーの高沢が寝過ごすという大失態をおかしたせいで、出発が遅くなってしまった。二ノ池から一ノ池に向けて直登し、剣ケ峰頂上を目指す。その後、一ノ池周辺をまわる。雪がとても少なく、雪上歩行の訓練がうまくできなかった。しかしながら、寺田さんのアドバイスの下、フィックス通過の訓練をする。慣れていない者が多かったため、多くの時間を費やしてしまった。

二ノ池小屋に戻ってから設営撤収訓練を行う。これも予想以上に時間

がかかった。この夜には河野、原、寺田の3人がビバーク訓練をする。やはり寒かったようだ。

25日（晴）出発（7・35）～雪上訓練～二ノ池小屋にて撤収（9・00～10・00）～王滝頂上（10・35）～三笠山（12・40）～八海山荘（13・35）

朝から滑落停止やアイゼン歩行などの雪上訓練を行う。雪が少ないために所々、岩が出ていて、やりにくいこともあった。予定ではもう1日いるはずだったが、訓練もままならないため、期間を短縮して、この日に下山する。三笠山まで下ると、入山時にはいなかったスキー客がたくさんいた。

◆冬山合宿・南アルプス

［期間］12月26、27日

［メンバー］高沢（L）、河野（SL）、乾、原、竹内

12月26日（晴）夜叉神峠登山口（9・30）～夜叉神峠（10・30）～杖立峠（12・00）～苺平（13・55）～南御室小屋（14・20）

冬山を経験している者が高沢のみであること、御嶽山で思うように訓練できなかったことなどから、偵察時より行程を短縮した。杖立峠の辺りからだんだん雪が出てくる。南御室小屋の水場が雪に隠れていなかったので、水を簡単に確保できた。

27日（晴）出発（6・30）～観音岳（8・20）～地蔵岳（11・00）～鳳凰小屋（12・05）～燕頭山（13・25）～御座石鉱泉（15・40）

この日も天候に恵まれた。地蔵岳付近では30～50㌢の雪があった。鳳凰小屋へ下るために沢筋を使うが、雪が少なく問題なかった。御座石鉱泉からは、そこのおばさんの勧めでタクシーではなく御座石鉱泉の車に乗せてもらった。

◆個人山行・西岳

［期間］4月29日～5月2日

［メンバー］青木（L）、寺田、藤田、川口、溝西＝以上OB、高沢（3年）

4月29日（晴れのち曇）中房温泉（6・30）～合戦小屋（10・10）～燕山荘（12・00）～為右衛門吊岩の北2678m付近（14・40）

合戦尾根の登りはさすがに少し疲れた。燕山荘を過ぎる頃から雲が出てくる。蛙岩は冬季ルートを通る。2678m付近の雪の上にテントを張る。

30日（雨）出発（4・50）～大天井岳（8・10）～赤岩岳（14・00）～西岳（16・00）～西岳ヒュッテ（16・30）

大天井岳を過ぎると、少し道が悪くなる。前夜の降雪のせいか、ラッセルも出てくる。赤岩岳付近で一部フィックス工作をする。西岳に着いた頃には晴れ間も見え、槍ケ岳が見えかくれした。西岳ヒュッテの冬季小屋を掘り起こしてみたが、中が狭く、結局、テントを張った。

冬山合宿　苺平へ向かう道中

5月1日（晴）出発（6・00）～大天井ヒュッテ（11・30）～切通岩の数百m北（16・10）

来た道を引き返す。好天の中、いいペースで大天井ヒュッテに着く。大天井岳をトラバースしようとしたら、悪いところがあってフィックスをしたため、結局、時間がかかってしまった。

2日（曇）出発（5・25）～燕山荘（8・00）～合戦小屋（8・30）～中房温泉（11・00）

たんたんと歩く。中房温泉に入湯した。

（高沢・河野記）

◆ホームページを開設

今年度の現役チーフリーダーを務める河野美樹（医学部4年）です。どうかよろしくご指導ください。

このほど、インターネットに大阪大学山岳部のホームページを開設いたしました。今のところ、新入部員獲得のためのクラブ紹介がメインとなっておりますが、徐々に山行の記録なども増やして、山の情報源となるようなページにできれば、と考えております。また、交流の場として掲示板も設けておりますので、OBの方も近況などをお気軽にお書き込みください。

URLは次の通りです。

http://users.hoops.ne.jp/osaka-yama/

ホームページについてのご意見・ご要望は河野までいただければ幸いです。アドレスは

konomiki@yahoo.co.jpです。

東京支部だより

1泊2日山行が定着

石原　敏雄

2000年秋山山行でのことだった。土曜日早朝に東京を出て、日帰りで山頂往復、麓の温泉宿で1泊して翌朝解散という東京支部の山行パターンが、山中の山小屋（できれば温泉付き）に1泊する2日間の回遊パターンに変わった。その秋山は11月3、4日に三斗小屋温泉の煙草屋に泊まる那須岳回遊の2日間コース。愉快なメンバー（野田、田井、保母、前沢、出雲路、糸井、田中、石原）と好天に恵まれて秋景を楽しんだ山旅だった。温泉も良かった。灯りの全く無い夜の露天風呂に酔っ払って入り、帰りの坂道を転げ落ちたが、幸い、怪我は無かった。この山行が好評だったことから、これからも1泊2日でということになった。

続く冬山山行は12月29、30日の2日間で八ケ岳の赤岳鉱泉に1泊して赤岳、硫黄岳縦走を試みた。この時も天気に恵まれ、積雪も少なく、冬山らしからぬ好条件であった。ワンタッチアイゼンの片方が外れたまま歩き、気が付いて慌てて取りに戻った先輩もいたような余裕あるペースで比較的簡単に縦走できた。赤岳温泉小屋は冬季は閉鎖されているが、個室で各人（野田、牧野、出雲路、石原）がシングルベッドで快適に眠れたのには感激した。

昨2001年の春山は4月14日に富士山五合目の吉田小屋に泊まり、翌日、山頂を目指した。少し風に煽られる程度の申し分の無い天候。九合目が近くなると雪面がしっかりとクラストしてきて、アイゼンの爪が半分も入らない。6本爪の簡易アイゼンの先輩は残念ながら九合目でギブアップした。感激の登頂後は、いつものように、うんざりする長い長い雪面の下りだった。

例年、5月連休と夏休みは、家族旅行などのために山行計画は無く、秋山は10月27、28日に安達太良山に出かけた（前沢、横尾、牧野、播本、石原）。紅葉には遅すぎたが、抜けるような青空のもと、汗をかきながらくろがね小屋へ。早く着きすぎたので、安達太良山頂を往復。夜は、温泉にたっぷり浸かったのと酒の酔いのせいで、小屋名物のコーラスに参加した先輩の声が次第に遠ざかり、いつの間にか眠りに落ちていた。翌日は、傘の懸かった太陽とともに出発。天気と競争で鉄山、箕輪山を越えて野地温泉へ急ぐ。箕輪山の下りは、泥まみれの道に足をとられて難儀すること甚だしい。野路温泉のバス停手前で、遂にポツリポツリと雨に。バス待ちと称して、その間に温泉を堪能した。全く温泉好きだ。

昨年最後の山行である冬山に選んだのは、12月29～31日の3日間で中房温泉と燕山荘にそれぞれ1泊しての燕岳登頂。入山日は、汗をかくほどの日和に恵まれ、中房温泉で一汗流す。明けて30日は朝から雪が降り、参加者7名のうち出雲路さんはここから即下山。野田さんと播本さん夫妻は、行ける所まで登ってから下山。残る米林さん、牧野さん、石原は燕山荘まで辿り着き、翌朝に燕岳を登頂。それぞれ異なる予定を立てた3パーティーが行動開始。

合戦尾根の取付きあたりでは弱かった風も、高度を上げるにつれて時々強く吹く。冬山としてはかなり軽装の我々の体温を容赦なく奪う。下山組と分かれて、やせ我慢をして登る登頂組が見つけたのは、休憩所として期待していた合戦小屋が半ば雪に埋もれて閉鎖中で、風上に向かっては目も開けらない程に荒れる猛吹雪の吹き曝しの森林限界線であった。ザックの中のヤッケ上下やミトンを取り出して着込むも、冷え切った体はなかなか温まらない。「悔しいけど、出直すことにしよう」と一目散に下山。穂高温泉でのんびりと飯を食べていたら、青空が広がり、合戦尾根が見えてきた。「予備日無しの冬山計画は無理かな？　しかし、必ず近いうちにリベンジだ」

東京支部の会員には、「昔とった何とか」だけでなく、普段から努力している人たちがいる。散歩を欠かさない人から、筋トレに励みすぎて腰の筋肉を傷めてしまう人、健康管理の為に簡単な医療を自分自身でしながら登る人。今後も面白い計画を立てて、こんな人たちと、楽しい山行を続けていきたいと思う。

（1970年理学部卒）

八ケ岳・赤岳頂上で。左から出雲路、野田、石原、牧野＝2000年12月30日

会員の近況

（夏の白馬集会と新年会の出欠はがきから抜粋しました。その後の変動などは未確認。卒業年次順）

大久保　勝己（医23）お蔭様で元気です。細野の阪大山岳会記念碑、一度、訪れたいと考えております。若い時の仲間が最近次々と亡くなられ、寂しいです。

加藤　幹太（理27）7月に滋賀大学を退職、その頃より入院生活（胆石）を40日以上送りましたが、現在はすっかり回復しました。初めての無職の生活を楽しんでおり、時々歩くことを心掛けています。

久保　三朗（工27）細野へ行くのも億劫になりました。老いの衰え、覆い難し。で、昨冬登ったのは浅草、黒姫（只見）の2峰のみで、あとはゲレンデ遊びに後退。もっとも、高さはヴァノワーズ山群のグランモンテの肩3400㍍まで行きました。無雪季では、昔に比べてアプローチが便利になったのを利して、大谷嶺（南ア前衛）、釈迦、七面（大峰）、国見（台高）、七種（福崎）、宝永山（富士）などへ行きました。

川島　勇（工29）ここ4年ほど、炭鉱各社のOBと組んで、技術論文（選炭関係）のデータベース化を進めてきましたが、2001年4月に完成、一息ついています。戦後50年間、4千件の論文の要約が1枚のCD―ROMに収められました。住友関係の論文をパソコンで引き出して年月順に並べてみると、自分たちの歩んだ技術の流れが見えて興味深いものがあります。

大村　一生（理29）2001年1月、東京より大阪に転居、終のすみかを大阪に定めました。すべての公式の仕事を終えて、まったく自由の身となり、多少、戸惑っています。

二木　節夫（工29）会社のOBで山好きな連中と月に1回、主として奥美濃の山々に登っています。千㍍前後の山ですが、今では林道が縦横に走っており、割に楽に登れるようになりました。夫人同伴が原則で、標準タイムの1・5倍ほどかかるので、会の名称も「ゆっくり登ろうかい」とつけました。また、一昨年から更に自然に親しむため「里山ネットワーク岐阜」のメンバーになりました。荒廃していく里山を再生し有効活用する方法を考え、行動するボランティアのような活動ですが、若い人たちと一緒に体を動かしています。間伐とか遊歩道造りがメインですが、炭焼き窯で木炭や竹炭を造ったり、椎茸を栽培したりするのも活動の一つです。

難波　恒雄（薬29）2000年8～9月にムスタン王国へ行き、国王の侍医であるアムチ（チベット医）からチベット薬の製薬所建設への協力を頼まれ、基金を募金し、2001年末、ローマンタンに小さな製薬所が完成しました。2002年5月初旬、開所式に出席する予定です。

濱　一枝（薬30）元気にしております。山道でなく平地をできるだけ歩くよう努力しております。とぼとぼでなく、さっさと歩きます。点訳ボランティアに励む毎日です。

関本　靖裕（理31）ニュージーランド国立研究・開発機関の日本代表として現役並み？に働いています。年に3、4回、NZへ出張したり、向こうから来日したりと多忙にしています。その間、5月に3週間、スペインのアンダルシア地方を中心に旅をし、帰路、アムステルダムに立ち寄り、連日、コンセルト・ヘボーのコンサートを楽しみました。日常は、教会活動のほか英国英語会話の集いなどで忙しく、自作のログハウスに行く時間がないこのごろです。

高木　俊夫（理31）山岳部の落第生でしたが、そこで得られた薫陶に対する感謝の念の程度では誰にも負けないと自負しています。最近は山らしい山に出かけることも減っています。それでも退職後にチロルに2回出かけました。

鷺沢　忍（工31）体調は年の割に良い方？　2、3カ月に1回ぐらいのトレッキングと年1回のスイス行き（トレッキング）を楽しんでおります。

横井　保枝（文31）今冬は日本海側の積雪が早かったので、年末に初滑りをしてきました。スキー用具一式、新品を揃えましたので、まだまだ続けたいと思っています。

西川　元夫（工32）一応は健康であると自分では思っていますが、歩く速さや息切れ、好奇心などで年齢を実感させられます。目下、世界の旅行関係業界の人々の交流と親交を目的とする組織に属して、ご恩返しの活動をしています。

石澤　命久（歯32）明和病院の方は嘱託の年限も終わり、非常勤で月水金と勤めております。最近、スキーに凝っておりますが、小生、足で踏ん張る昔のスキーで、それでは体力が続かんよと言われて、一生懸命、省エネルギーを考えております。今年3月、ツェルマットに10日間ツアーに行ってきました。好天に恵まれ、クライネマッターホルンからイタリア側へのコースを楽しみました。

野田　憲一郎（経35）山の環境保護組織「ヒマラヤン・アドベンチャ

ー・トラスト・オブ・ジャパン（HAT-J）」の理事に選ばれました。夏はここで国際的イベントが続き、白馬集会の後も、松本での「青少年国際交流環境体験登山」のシンポジウムに回りました。元はと言えば、山のオーバーユース問題の検討会を立ち上げたのが1年前。思わぬ大仕事になってきました。HAT-Jでは関西支部を設立中。関心のある方はご連絡下さい。

村井　忠雄（工36）8月末は予算編成の時期で、毎年くやしい思いをしております。今年は打出さんの労作の記念碑の除幕式など皆様の語らいも盛り上がることと思います。日常はゴルフと船釣りで運動を消化しております。山行には体重を7キロほど落とす必要があります。

高橋　雄二（工37）10年間の単身生活を終え、ようやく四日市から帰ってきました。ただ、体調すぐれず、（新年会は）残念ながら欠席させてもらいます。

田村　俊秀（医38）9月にネパールのムスタンを訪ねるはずが、奥地の治安悪化で中止です。JICAでネパールにいた頃、故ビレンドラ国王のプジャ（祝福、額に赤いテカをつける）を受けたことがあり、残念です。トリプバン大学病院は王党派の教授と毛沢東派の学生が対立していました。これからどうなることやら。今や、ヒマラヤをヘリコプターやマウンテンバイクが駆け回り、旧きネパールは消えつつあります。

木村　弘子（医38）8月に屋久島へ行き、縄文杉（標高1300m、往復9時間）を見ました。まだ歩けると自信を持ちました。10月には上高地へ行き、学生時代に涸沢で合宿したことを思いました。快晴で穂高連峰が美しかったです。

梶本　孝治（工38）還暦を期に職場を神戸に変えました。朝夕、六甲山を身近に見て仕事ができて最高です。天気が良ければ毎週、裏庭を散歩するように六甲を歩いています。昨年は7月に北八ケ岳より南八ケ岳を縦走しました。今年は、湯俣温泉から竹村新道を登り、新人の時の夏山合宿の地、槍ケ岳北鎌尾根をながめてこようかなと思っています。

宇野　雅明（医39）仕事中（診療）のため（新年会を）欠席します。日曜ごとに近所の山やお寺などを歩いています。最近の目ぼしい所は大峰山、木曽御岳などです。

木原　秀幸（工39）昨年、60歳になり、時の流れの速さに驚いています。幸い、元気だけが取柄で、これからは何事も頑張らずに楽しみたいと思っています。この冬はスキーと温泉を気ままに、暖かくなったらゴルフとトレッキングを楽しもうと思っています。

大川　和秋（工39）まだ徹夜を続ける体力が残っているようです。日曜には宿舎の掃除、洗濯、1週間の献立、その後は昼寝。そして近隣の山に出かけます。見晴らしの利く時には大山が望めます。僕の印象としては美保関から眺めるのが一番素晴らしいようです。

播本　裕晃（法40）数年前までは結構山に登っていましたが、ここしばらくはごぶさたしています。現在は来年60歳の「ハッピーリタイヤメント」を目指して、やり残した仕事の仕上げ中です。代わりに、小生が仕込んだカミサンが山登りに頑張っております。

辻　信男（工42）くも膜下出血も良い方向に進んでおります。右目をなくしましたので、左目を大事にしています。このあたりより、また新しい人生が始まるのかなあと思います。

黒田　治朗（医44）勤務先の川西市・協立病院では、泌尿器科をほぼ一人で担当し、社長兼小使いの状態です。運動はゴルフだけで健康を維持です。山登りをする体力は目下のところなしという状態です。

岡田　謙治（法44）2001年3月より、自宅・自営にて「KOKA Software」というシステム開発（パソコン中心）の仕事を始めました。ホームページのURLはhttp://koka-soft.comです。

中岡　和哉（医46）夏山登山を再開し、2001年は高瀬ダムから赤牛を経て黒部ダムに抜けました。赤牛は実に33年ぶり、5度目の訪問でした。小屋泊まりで行く夏山一人旅は江戸時代の旅行のようで、中高年には魅力ある形態です。

上松　一雄（工50）2001年は父が亡くなり、私にとっても人生を振り返る年でした。仕事は、世間並みに不況ながら、幸い、楽しんでやっています。今後も山岳部活動が活発であることを祈っています。

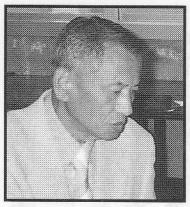
今村　義弘（工59）山には全く行かなくなりましたが、休みの日にはリュックをかついで鉄道の廃線跡の探索をしながら歩いております。

畑　秀信（人59）東京に来て2年ですが、関西では行けなかったエリアで新鮮な気持ちで山を楽しんでいます。お近くの方がいらっしゃれば、ぜひ同行させて下さい。

加門　洋一郎（基H11）関東の会社に就職し、週末は諸先輩方とあちこちの岩場に行って登っております。しかし、山岳部を卒業してクライミングをしている人が少ないのは寂しいです。

追悼

由比浜　哲也氏（本会会員）平成13年11月5日、脳梗塞のため死去、72歳。昭和28年文学部卒。本会発足以来の会員で、24年度の厳冬期白馬主稜登攀などに参加された。卒業後は中学校の英語教員を長く勤められ、平成3年に発刊された篠田軍治初代会長の追悼録の編集に尽力された。



抜群のスタミナは遠く

山本　光二

由比浜君は阪大入学後すぐ山岳部に入った。旧制神戸一中在学中から山岳部に属し、独力で行動できる人であった。部の山行への参加は、昭和24年度冬の白馬主稜厳冬期初登攀のサポートなど、回数は少なかったが、骨格がしっかりしていてスタミナのある彼はボッカやラッセルに格別の力を発揮し、心ある人々の記憶に残った。

平成3年春、教員を定年退職した直後、故・徳永篤司会長の要請で篠田軍治先生の追悼録の編集委員を引き受け、徳永病院の一室で編集作業を精力的にこなした。この追悼録の題字は彼の筆によるものである。

追悼録刊行から数年後、私は、近畿病院で偶然、彼の入院を知り、徳永さんにすぐ連絡した。数日後、見舞いに行くと、院長の来診があり、小一時間、もっぱら徳永さんとの関係を聞かれたとのことだった。徳永さんが由比浜君のためにどのような連絡をしたかは不明だが、人一倍口の重い彼が、山登り以外のことで徳永さんとの長い人間関係を十分に説明できなかったことは推察できる。ちなみに、院長は病状については一言も触れなかったとのことである。

これ以後、彼は人工透析を受ける身になったが、比較的元気で、夏の白馬集会には再々参加した。しかし、透析を続けること8年、余病も併発して抵抗力低下は如何ともし難く、ついに別離の時を迎えることになったのは痛恨の極みである。　合掌

（1954年法学部卒）

山本　久夫氏（本会会員）平成13年9月5日、北穂高岳から槍ケ岳に向かう途中、北穂小屋北方の縦走路から滝谷側に転落して死去、61歳。昭和38年法学部卒。卒業後は旧北海道拓殖銀行に入り、海外勤務などを経て、取締役資金証券部長などを務められた。

山本久夫君を偲んで

梶本　孝治

山本久夫君の入部は2回生からでしたが、学年は同年でした。山でこそ先輩顔をさせていただきましたが、実に多くを学びました。山にどっぷりの私たちの中にあって、彼は読書家で、サルトル、カミュを論じると独壇場でした。また、卒業後一時、神戸の英国婦人宅で英会話を一緒に学んだ仲間でもありました。出席者が自由に話題を出すサロン風の教室で、私のテーマはビートルズなどでしたが、彼は英文学など格調の高い会話を進めていました。しかし、彼の真骨頂は鋭い感覚を持った実践の人であり、努力の人であったと思います。勤務した銀行の米国支社で第一線ディーラーとして活躍し、若くして取締役に就任した実績がそれを証明しています。

山岳部時代の彼を振り返ると、小柄な体に高性能の精密機械が組み込まれたような、疲れを知らぬタイプでした。1961年6月、彼と山本彰三君（当時、浜田）と私の3人で穂高周辺の岩場に遊んだ時、雪解け後で岩がボロボロになった明神岳東南壁を登る際、私たちが落石の音を左右の谷にこだませながら登るのに、彼はまるで猫が音も立てずに瓦屋根を歩くように登り、その登攀技術に舌を巻いたものでした。

あの彼が数十年を経たとしても、穂高の縦走路から転落したとは信じ難いのです。人には魔がさす一瞬があると言いますが、私は、戦いに倒れた勇者を天上に導くという伝説のワルキューレが突風に姿を変えて彼を天上に連れ去ったと信じています。今、山本久夫君に置き去りにされた私たちをヘルマン・ヘッセの一文が慰めてくれます。

「去ってしまった者たちは、彼らがそれによって私たちに影響を与えた本質的なものをもって、私たち自身が生きている限り、私たちとともに生きつづける。多くの場合、私たちは、生きている者とよりも死者とのほうが、ずっとよく話をしたり相談したり助言を得たりすることができる」

改めて哀悼の意を捧げます。

（1963年工学部卒）

編集後記

大野義照会長就任後初の会報第4号をお届けします。白馬村の創立50周年記念碑は、今冬、例年以上の深い雪に埋もれても、びくともしなかったそうです。今号から「東京だより」を新設する一方、「会員の近況」欄を拡充しました。どしどしご投稿ください。

（会報担当・高田邦雄）